

第四章 観 光

第一節 市内観光

滝川公園 空知に誇る水郷滝川公園は、敷地一万六、四〇〇平方メートルを擁した広大な地域で、沼あり、川あり、山あり天然の美をそなえたうえに、近時ますます人工の美を加えて、名実ともに観光滝川公園の名を高めている。

現在この地域は、砂川市の地域にあるが、この地はもと下赤平といい、沼の名も通称赤平沼とよんでいた。

次に中田弥三次郎の古老談の一節を掲げよう。

明治三十年頃まで赤平は山岸の所まで空知川が流れており、東三丁目突当りの鮫湖の四・五丁下流から今の富平地帯の山際を流れて空知大橋の少し上手に流れていたが、明治三十一年九月の大水害で本流が滝川東裡地帯に切替って、現在のような地形に変わったのであるが、「赤平沼」は全く空知川の本流であったもので当時富平は未開の地ではあったが、確か滝川の領分であったのだ。これでもわかるように、赤平沼は空知川の河跡湖として、その後長い間、鮎、鯉、うぐい、えびなどの繁殖により太公望連を喜ばせ、また滝川酪農社の牛の放牧地となっていた。

町の漁人鈴木吉次、今忠策らが引網を利用して年々漁獲をしたり、時には町吏員や警察署員を招待して鮎の薩摩汁と冷酒に興じて、園

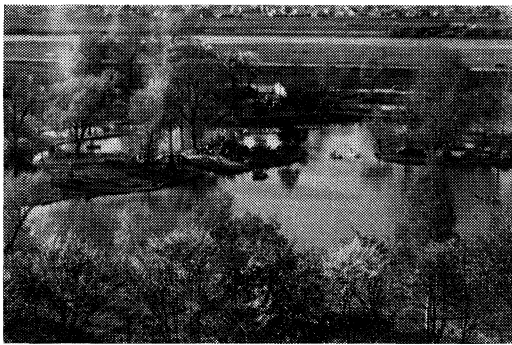
遊を試みたこともある。

こうしたことが町民の認めるところとなって大正二年、大正天皇御即位の記念事業として、町役場、警察署の企画で町民総動員により公園地の雑木を払い草刈りをするなど、清掃をしてここに初めて「滝川公園」と称するにいたった。

昭和七年、石渡寛、広部弥助、藤山九一ら同志が、この地域を利用して大遊園地を建設しようと計画し、「滝川公園期成会」を結成し、犠牲を払って着々実行にうつしていった。しかし、戦争がしだいに激しさを加えるようになり、これを顧る暇もなく放置されていた。

しかし、終戦後世情も落ちつき、荒廃にまかせていた滝川公園の整備再開を要望する声が出てきた。

水郷川滝公園



町でも町民憩いの場所とし、また外客誘致の一環として公園整備に踏み出し、「滝川公園保勝会」と協力して、昭和二十七年頃から五か年計画を樹てて町費六百余万元を注ぎ込んで、公園を整備することになった。

1 回遊道路をつくる―遊歩道路一、八〇〇メートルを各種円曲線を交えた幅三メートルの路線をつくり、遊歩の気分が満喫できるようにし、また優雅な橋を架ける。



滝川公園（昭和28年）

2 植樹—喬木一五〇本、灌木一五〇本、桜樹一五〇本を植えて園内の美をはかる。

3 遊具を施設する—児童の遊び場として適当な各種の遊具を施設し、迷路、動物舎、花壇、あずまやを作り中央広場には高さ二〇メートルの鉄骨又は鉄筋コンクリートの平和記念塔を建設する。

4 水遊び施設—水面を自由に遊べるようボート三〇艘を設備し付帯する舟着場を設ける。

5 柵垣をつくる—富平道路に沿って木柵約四〇〇メートルをつくり正門をつくる。

6 照明設備をつくる—上水道水源地の高

所要経費	総額	六、一三二、〇〇〇円
園路	一八〇m	七二〇、〇〇〇円
植樹	四五〇本	二四〇、〇〇〇円
あずまや	五カ所	一五〇、〇〇〇円
ボート	三〇艘	一、五〇〇、〇〇〇円
橋梁	三カ所	四五〇、〇〇〇円
柵垣	四〇〇m	六〇、〇〇〇円
記念塔	一カ所	九〇〇、〇〇〇円
動物舎	八カ所	二四〇、〇〇〇円
児童遊具	一式	五〇〇、〇〇〇円
舟着棧橋	三カ所	九〇、〇〇〇円
照明設備	一式	四九七、〇〇〇円
売店、休憩所		五七五、〇〇〇円
整地、迷路、花壇、広場		二一〇、〇〇〇円
計		六、一三二、〇〇〇円

昭和二十八年五月十七日、面目を新たに「さくらまつり」を実施した。

今や全く面目一新して諸般の施設も成り、毎年五月十日からの桜祭りを始めとして滝川市民の健全行楽地となった。春は桜、夏はボートを楽しみ、秋の紅葉、冬のスキー、スケートのウィンタースポーツ等、また季節ごとに草花は咲き乱れ、市民はもちろん近郊から来て遊ぶ家族連れの行楽は年と共にふえ、水郷滝川公園の名を高めた。さらに裏山の学校植林地、上水道水源池、四十七義士の墓などを一環した観光道路も計画されていることから、今後さらに一層賑いをみることになると思われる。

なお、明治二十三年ごろの空知川本流は山際を流れていたが、そこに楢円形の中島ができ、通称弁天島などとよぶこの島には多くの蛇が棲息しており、弁天島から崖の方は急流で深さが三メートルもあり、鮫（ちょうざめ）が住んでいたといわれている。

昭和七年この辺一帯の公園計画の時、中の島に神社を建て巖島神社と称した。その後、昭和二十九年の十五号台風で大破した時、町で大修理を加え、植樹などを行い美観を添え、公園全体の風致を増している。

国木田独歩の碑 明治文壇の奇才国木田独歩が二五歳の若い情熱を燃やし、キリストの永遠の愛を信じ愛人佐々城信子と秋の塩原に恋の逃避行に出て、その足で独り北海道に新天地を開拓し、ここに愛の巣を求めて、ひょう然と道庁を訪れ、新しい土地を開拓したいと申し出たのは明治二十八年九月二十日のことであった。

「それなら空知川のほとりが良いでしょう」ということになり、九月二十五日土地選定に空知太駅に下りたった。

彼の第一印象は著書「空知川の岸边」「独歩書翰」「欺かざるの記」などにその雄大な空知の自然美を、あます所なく描写している。空知太駅から馬車を駆って、三浦屋（当主は三浦庄作）に少憩して、主人の教えるままに歌志内に廻り山越えをして空知川に出たが、夢多い彼は空知川付近の大自然に感嘆の目を見張りながら、この悠大な自然のなかの空知川の岸边に、恋と文字とを求めたのである。

「旅館の雨は哀れのものに候。況んや秋己に木の葉落ちそめたる此の頃に於ておや。旅館無人暮雨魂 故郷有母秋風涙の名句も、わが身の上の今の事にやと思ひ当たり候」とせつせつの旅愁を述べている。

その三浦屋は現在の空知大橋を渡り、滝川公園に向かって約十五メートルほどの積の真中になっていた。

「ただ見る此一小駅は森林に囲まれている一つの孤島である。停車場に附属する処の二三の家屋の外、人間に縁あるものは何も無い。長く響いた汽笛が森林に反響して脈々として遠く消え去った時、寂然として言う可からざる静けさに此の孤島は還った」と嘆息させた空知太駅は信号所付近である。

「北海道は実に壮大な自然です。バクバクボウボウたる大密林、わたしは一日も早く貴女と共にこの原野に住みたい。……頼りに思うは貴女だけ、ここで十年も辛抱したらきつと独立自活出来る。そ

の時までに文学界でも一旗あげるだろう」と愛人信子に手紙を送り夢を追って楽しい空想に耽っていた。

彼は三浦屋に休憩すること二時間余で、空知太駅に引き返して歌志内に向かい、今石川旅館の子供と歌志内の佐久志から赤平の出合橋に出る山路を経て、井田某という道庁の役人に面接したのであるが、当時空知川の沿岸道路がいかにも峻しかったかがしのばれよう。

しかし、千古斧鉞の入らぬ密林は病弱な彼の開拓にはあまりにも夢と現実との隔りがあった。昨日までの信子との空想は一瞬にして覚め、歌志内、砂川を廻って東京へと引揚げていった。

九月十七日上野駅発、九月十八日夕刻室蘭上陸、同十九日札幌入り（札幌滞在）、同二十五日札幌発空知太下車、歌志内今旅館泊り、同二十六日今旅館泊り、「空知川の岸边」上梓明治三十五年一月十二日。

昭和七年五月、石黒白萩、白井敏三等が中心になり滝川歌人会などによって尺角一二尺の青木の木碑が岩見紫川の碑文字で、三浦屋敷跡に建てられたが、太平洋戦争中、心無い人のためいつしか取り払われてしまった。

昭和十八年八月、独歩の足跡を研究していた滝川駅の工藤鉄男がこれを遺憾に思い、自費で五寸角高さ一五尺のトド松の木碑を造り、畑中順太郎の揮毫により「国木田独歩之碑」を再建した。

このころから滝川文化協会常任理事であった根井清を中心として、石造の碑の建設が持上り昭和二十五年三月十五日「独歩の碑」建設期成会が結成された。

会長武田勝夫、副会長佐野一夫が推薦され委員として滝川町及び砂川町から根井清、工藤鉄夫、菊地秀一、谷口和夫、田中芳勝、荒木滋朗、千葉壮一、三浦光正、金子協平、石黒正信で、総工費一万は滝川町、砂川町の助成のほか、資金調達のため鉛筆販売、映画興業による利益を収めこれを充て、篤志家の寄付に頼らない方針をとったので、相当な苦勞が伴ったといえる。

鉛筆について少しくわしく述べると、一本八円二万本を目標にして、滝川や新十津川の学校、各事業所で、砂川、上砂川にまで及んでいる。



国木独歩

鉛筆はキャップ付の水松、「国木独歩碑建設資金」の銘を入れ札幌キンシ鉛筆株式会社製であり、結局のところその純益は原価四万五、〇〇〇円とし、六万八、〇〇〇円程度



独歩の碑

となり、これが建設費財源のもととなった。

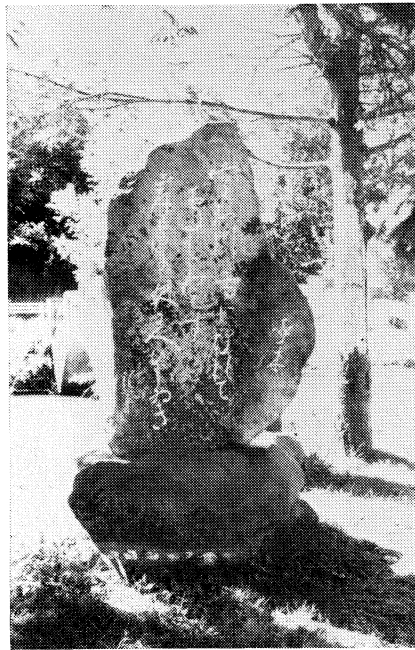
建設場所は滝川公園入口近くの独歩ゆかりの空知川岸辺で、碑石は赤平町ホロクラ川上流の自然石、台石は料亭松の家の庭石基盤は空知川の石を集めたもので、もと日展審査員一水会員中村善策の揮毫、石工山崎鶴吉の彫刻により、昭和二十五年九月二十五日建立、十月三日除幕式が盛大に行われた。

碑面には「空知川の岸辺」碑陰には「余は今も尚空知川の沿岸を思ふと、あの冷厳なる自然が、余を引きつけるように感ずるのである。何故だらう」と記されている。



石川啄木

石川啄木の歌碑 この歌碑は、作品の生まれたゆかりの地、空知大橋のたもとに金比羅神社境内に、滝川文化協会根井清、滝川歌人会石黒白萩、金子協平、斉藤正幸ら相計り、



啄木の歌碑

市内各界の協力援助を得て、昭和二十五年六月十日建立されたもので、昭和四十六年、滝川公園内にある空知川旧川筋の古川ほとりに移設されたものである。

碑面には

明治四十一年一月二十日 彼小樽を立ちて旭川に向ふ途中雪深き空知川を望みて詩情わき

空知川雪に埋れて鳥も見えず

岸辺の林に人ひとりのき

と小田観螢の揮毫が彫刻されている。

石川啄木と滝川とのつながりは、明治四十一年一月、啄木が小樽日報社から釧路新聞社に転職する途中、ここを通過した時のことで、啄木の日記によると一月二十日十時半岩見沢を出発、砂川で昼食その日のうちに旭川に着いているので、たぶん午後に入って空知大橋下流の鉄橋を通過する時、雪に埋もれた空知川を望見して生まれた作品であろうと思われる。

寂寞を敵とし友とし

雪のなかに

長き一生を送る人もあり

啄木は遠く日高の山中に籠った大嶋流人の面影を脳裡に描き、寂寞の中に唯一人生きる人間の逞ましさに打たれ「ああここにも人生がある」と生活に打ちひしがれた自分の心に火を点じ、鞭打ち続けたのである。

啄木はすでに国木田独歩の「空知川の岸辺」を読み、特に空知川に関心を抱いていたことはもちろんであり、夢多き日の独歩の理想主義と自己の現実主義とを心に闘わせていたことはいうまでもな

い。

北泉岳寺北海道四十七義士の墓

空知太泉学寺住職皆上正学は、

昭和五年以来勝景の地を選んで、北海道四十七義士墓建立の悲願を起し、本道発展のよすがとしたい計画を立て、昭和七年総代亀谷虎蔵らと相談し、その実現に努力したが、江戸三カ寺の名刹を誇る泉岳寺との了解を得るにいたらず、昭和十三年三月遷化した。

昭和十八年皆上誠信が法燈をついで二世住職に就任、寺門の興隆を念願したが、昭和二十年我が国未曾有の敗戦によって人心の混乱極に達し、進駐軍の駐留占領政策の実施で国民の虚脱状態はいつ尽きるともわからなかった。

昭和二十七年九月三浦光正とともに先代の意図した義士墓建設のことを談合し、たまたま三井建設社長星野靖之助と知り合う機会を得て泉岳寺との交渉を依頼した。

幸いに星野靖之助の努力によって、十二月泉岳寺の了解を得る運びとなった。

十二月十四日發起人会を作り、北海道四十七義士霊地建設世話人会とし、泉岳寺を改めて北泉岳寺と改称すること、四十七義士墳墓の土を分霊とし高輪泉岳寺と同一の墓を建設再現を目的として邁進することになった。

昭和二十八年募金に着手し、三十一年工事完成、同年七月十四日開服供養を行った。

北泉岳寺北東の台地に、高輪泉岳寺の墓所から四十七士の墓の土を移し、墓石はすべて同寸法、文字は原墓碑の拓本により彫刻した



義士祭



義士墓建立碑

もので、仙台石並びに登別石をとり寄せ、山崎鶴吉の彫刻で工事準備を進め昭和三十年十二月十四日、義士討入りの日を卜して起工式が行われたのである。

完成後は毎年十二月十四日に盛大な義士祭があり、名物の一つとなっている。

道立滝川畜産試験場 東滝川にあり、滝川駅より約八キロメートル、東滝川駅からは約一キロメートル、中央バス芦別方面に乗れば、下車して



滝川畜産試験場

徒歩で約八分である。

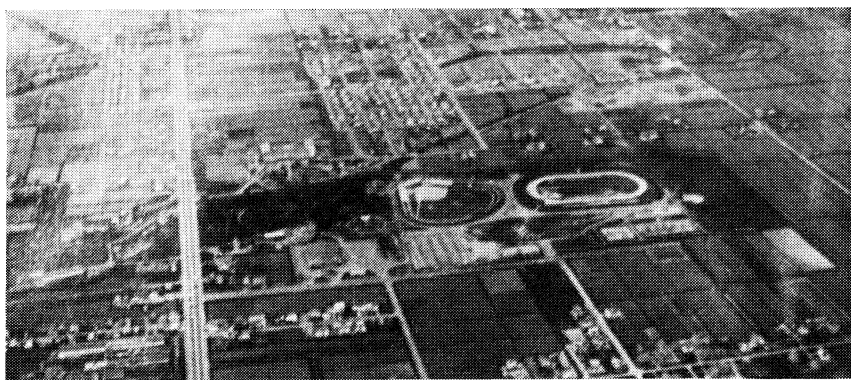
明治三十九年六月、当時農商務省の所管牧場として開設され、大正七年四月農商務省所管滝川種羊場を創設し、昭和七年二月五日、北海道庁立滝川種羊場に移管、昭和三十三年北海道立滝川種畜場となり、昭和三十七年道立滝川畜産試験場となったものである。

北海道の印象は大自然に恵まれた風物にあるといわれている。広大な草原、丘陵の放牧場に北歐的な羊舎が点々とマツチし、悠々草を喰む羊の群、牧夫の口笛ひとつで躍動する護羊犬コリ、展望台に上って眺めれば、まさに一幅の絵画を見るようで、北海道を象徴する大牧場、滝川畜産試験場を見逃すことはできない。

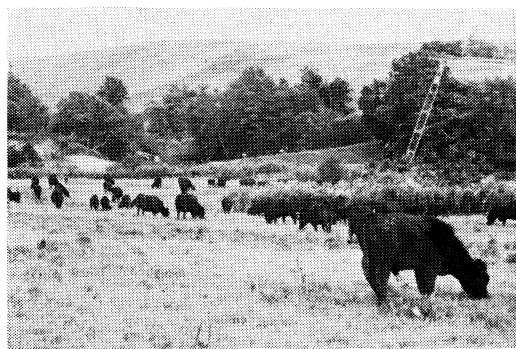
滝の川公園 明治二十三年、滝川屯田兵が入地して間もなく、大隊長野崎貞次の発案で、二の坂東側小高い所に神霊の地を選び滝の川遙拝所を建設した。これがすなわち滝の川神社であるが、その後明治三十八年一の坂に奉遷して滝川神社と称し今日に至っている。

しかし、この旧地には小祠を造営し、長く聖地として保存されていた。

大正三年九月この地に忠魂碑を建設して、毎年盛大な招魂祭を執



滝の川運動公園



丸加山の放牧

行っていたが、大正十四年七月滝川神社境内に移設され、その後顧みるものもなく放置されていた。
昭和三十四年市の発展に伴い、佐久間市長の発案でこの地を公園化する計画が進められるようになった。

公園の広さは一万一、六二一坪（三町八反七畝二歩）で、三十四年度中、地内に池を掘り、排水工事を施し遊歩道路を造る計画を樹て、まず御手洗川に工費一八万円を投じてタイコ橋を架設した。

三十五年度には五〇万円の予算で、ブルトージャーを入れ

て整地し雑木を整理するなど工事を進め、屯田兵ゆかりの地として後世に伝え、また市民憩いの場としての「滝の川公園」の実現を図ってきた。

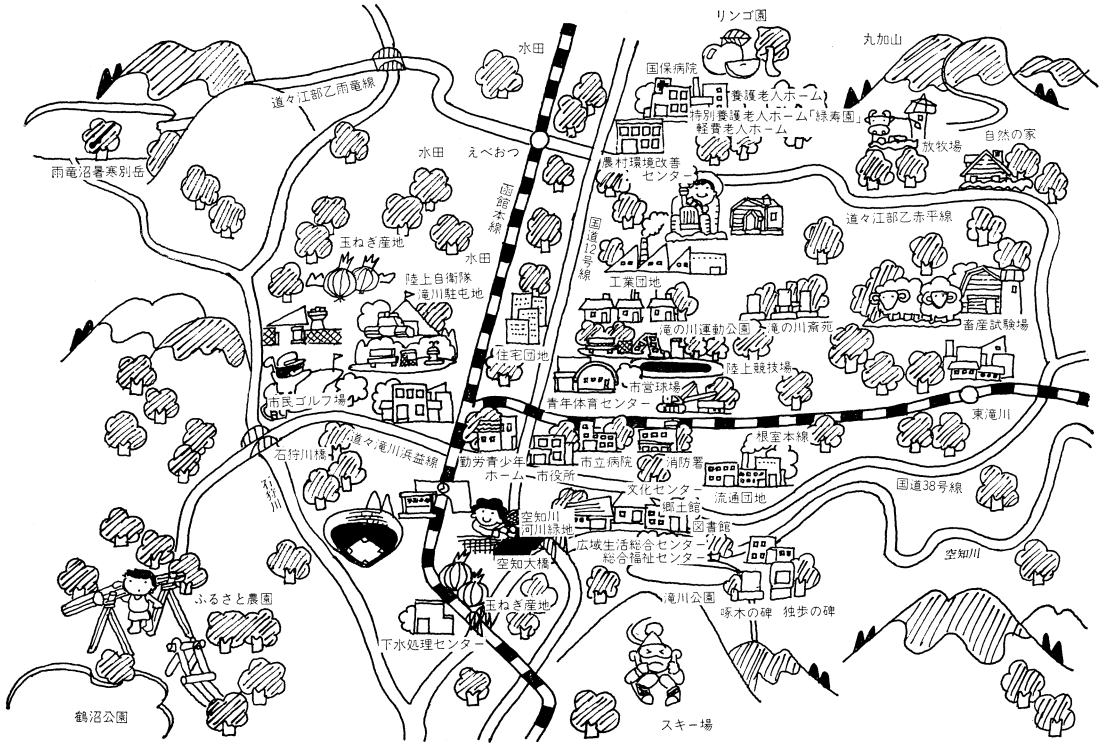
スポーツセンターを囲んでいる「滝の川運動公園」は、滝川屯田兵の練兵場として文武に利用された滝川発祥の地で、現在は一六万平方メートルに拡張し、プール、野球場、陸上競技場、バレーコート、テニスコート、約三千人収容の野外集会場などを備え、体力向上と憩いの場となった。

丸 加 山 滝川市江部乙町の丸加山（標高二八六メートル）に昭和四十七年から造成している広大な市営牧場がほぼ完成、畜産振興事業として開発した丸加山であるが、頂上付近からの展望は雄大、昭和五十年事業費九〇〇万円をもって展望台、駐車場、休憩所、便所その他の施設が整備された。

国道十二号線のカーブから東へ六キロメートル、頂上に行く途中あずまや（休憩所）と駐車場（三〇台）、さらに三三〇メートル行った頂上付近に鉄やぐらの展望台があり滝川市街、深川市街が見え、遠くに石狩川、約四百ヘクタールの草地に黒毛和種の肉牛があちこちで群をつくっている。

丸加山は市肉の牛肉生産基地として造成され、五十七年に完成予定で、現在肉牛四六五頭、乳牛三二頭、馬三〇頭が放牧されており山全体を覆う新鮮な空気と澄んだ空気は、多くの人々の心をなごやかにし、また、「自然の家」は、夏はキャンプ、冬はスキーにと、市民の学習・体位向上の場として活用されている。

滝川市案内



第二節 滝川市の周辺観光

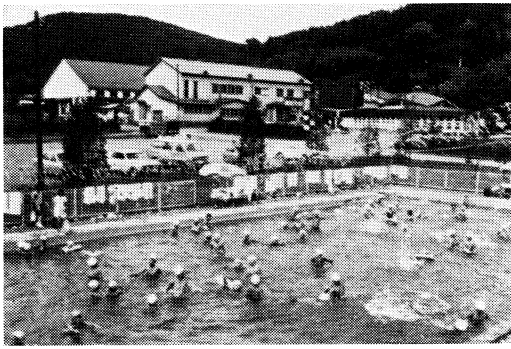
滝川市を起点にして、中央バスや車を利用して訪れることのできる中空知広域圏の観光地をあげると、

雨竜町（雨竜沼と南暑寒別岳）道々江部乙雨竜線

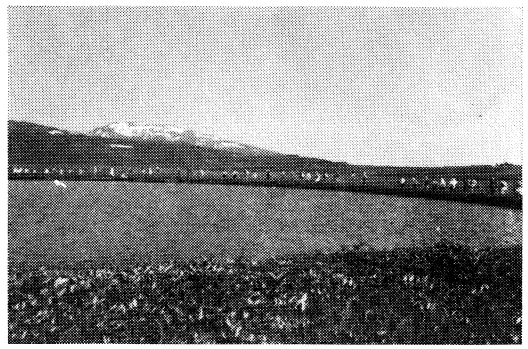
暑寒別道立自然公園の中にある雨竜沼は標高九〇〇メートル。日光の尾瀬ヶ原に匹敵する我が国では珍しい高層湿地帯、ミズゴケの堆積でできた広い湿原内には、大小百数箇の湖沼群（地塘）が点在し、数多くの湿原植物や高山植物が群生して、神秘的な景観をかもし出している。

芦別市（芦別温泉 国道三十八号線

途中、東滝川で道立畜産試験場に寄って、広漠たる草原に一団となって群れ遊ぶ羊の大群を見、雄大なスケールと牧歌的な風景を味わって、緑と湖の街芦別へ。ここは自然環境にも恵まれ、自然的、人工的観光レクリエーションの施設のある所で、日本で唯一カ所の十二支公苑、道内随一の銘石石定大浴場をもつ「レジャーランド」、薬用効果高い「芦別温泉」、樹木と小動物の多い旭ヶ丘公園、溪流でニジマス釣りを楽しめる河川、奇岩、樹木を映し落ちる滝の数々……。ホテル五重の塔など家族そろって楽しめる観光地。富良野、芦別道立自然公園、冬は国設芦別スキー場や三角山スキー場で楽しむのもよい。

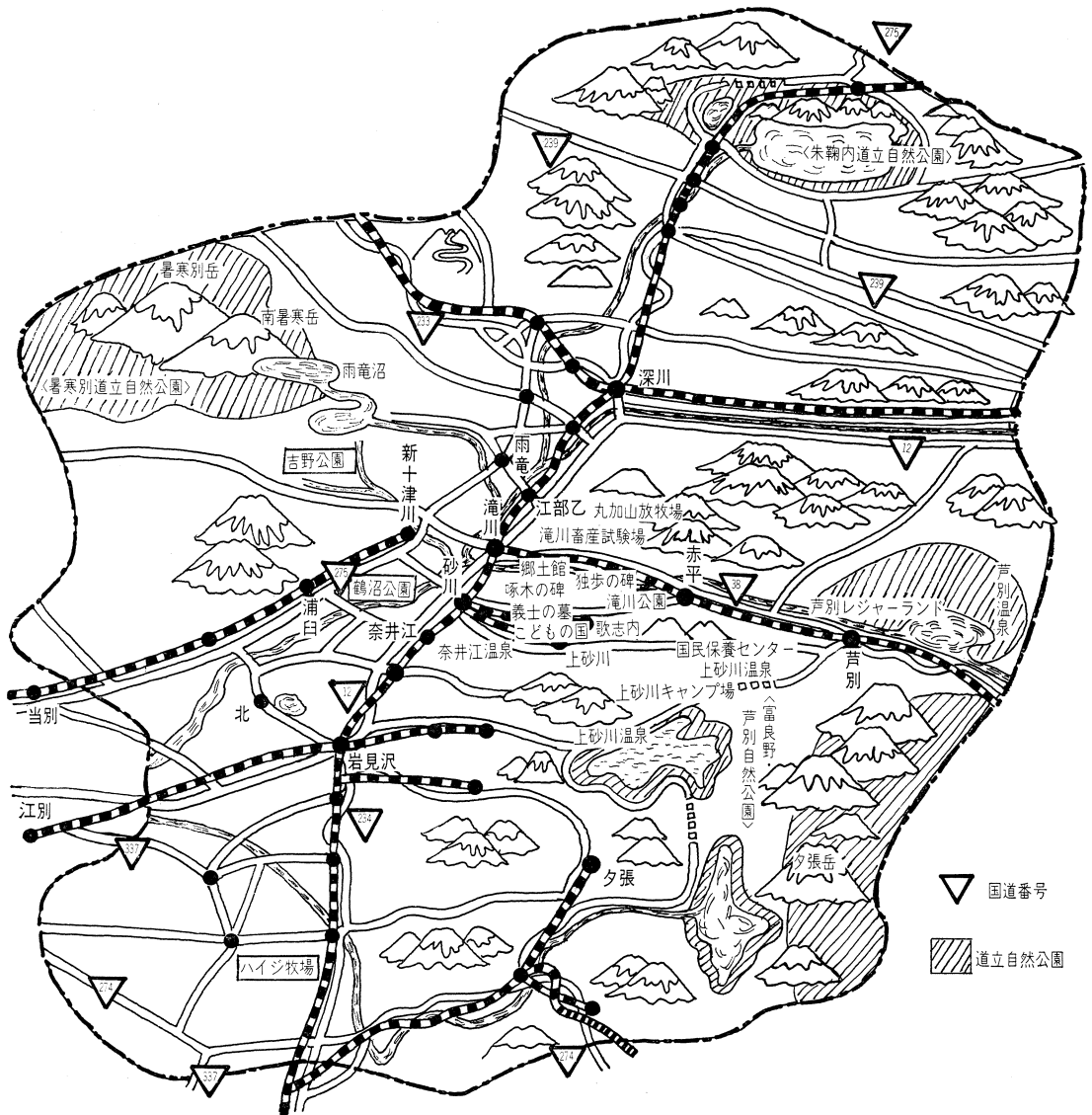


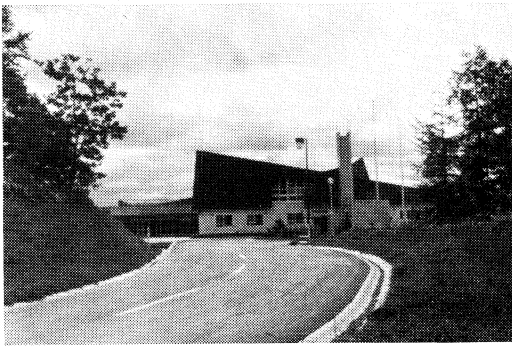
芦別温泉



雨竜沼と暑寒別岳

空知観光案内図

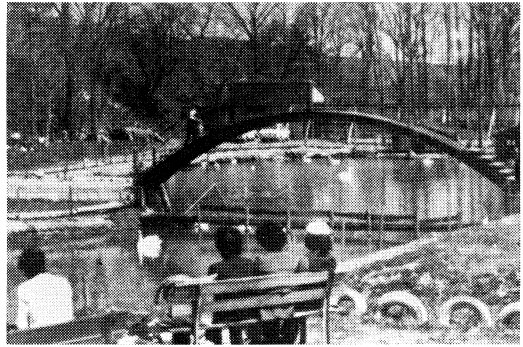




道立こどもの国



吉野公園



鶴沼公園

新十津川町（吉野公園）道々滝浜線

滝川から浜益に向かって二〇キロメートル、広さ約四万二千三百八十平方メートルの広大な面積で、誰でも気軽に家族づれで楽しめる。

浜益石を数段に積み上げた高さ一〇・五メートルの人工滝、駐車場、とんがり屋根のトイレ、あずまや、キャンプ場などあり、キャンプ場には炊事場やファイヤーストームが設置されている。

浦臼町（鶴沼公園）国道二百七十五号線

樺戸山連峰と石狩川に抱かれた浦臼には、大小の沼が多い、なかでも景勝の地は、元宮内省の鶴繁殖地であった「鶴沼公園」で、白鳥、鹿等の小動物を飼育しており、桜、紅葉の名所であり、人々の憩いの場として親しまれる。特産物としてメロン、スイカ、馬鈴薯などあり、ツツジ、シャクナゲ等の花木も生産している。「自然休養村」の指定地区も受け果樹もぎ取園、自然休養村センターの建設、その他公園整備等を行っている。

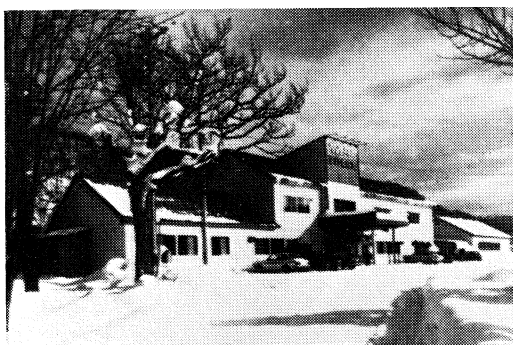
砂川市（こどもの国）国道十二号線

空知大橋を渡ったら、水郷滝川公園に寄り「独歩の碑」「啄木の碑」に空知川の詩情を味わい、国道に戻って、さらに「赤穂四十七義士之墓」に詣でる。やがて自然を生かした道内第一号の「道立こどもの国」の標識を見る。石山の方向に車を進めて行く。

既に完成した宿泊二〇〇人収容の道立自然の家、さらに体育館はじめ科学館、人造湖、野鳥の森レストハウス、こどもの国鉄道ロープウェイ等の施設が建設される。



上砂川岳国際スキー場



ないえ温泉

また、キャンプ場も一万二九平方メートルの中に炊事場、水道施設が完備し、一〇〇人収容ができる。

この他、北光公園があり、近くには海洋センターがあり、沼上にカヌー、ヨット、カッターが見え、風を受けヨットが帆を張り、滑るように走る姿もまた格別な趣きである。

・上砂川町（国民保養センター上砂川岳温泉と上砂川国際スキー場）

豊かな緑と清流に囲まれた（環境庁指定）美しい自然が、訪れる人々の心をなごませてくれる。上砂川岳の厳しい気象条件が創り出す優れた雪質、起伏と緩急に富んだ二、〇〇〇メートルの大ゲレンデ「上砂川岳国際スキー場」がある。

なお、国民保養地内には桜公園（二、〇〇〇本）つつじ、バラ公園、キャンプ場、清流奇岩を展望するハイキングコース等の諸施設があ

り、四季を通して、家族連れで楽しめる自然境である。

・奈井江町（ないえ温泉）

国鉄奈井江駅から車で一五分、中央バスが一日九往復しており、温泉付近の山々は、大自然に抱かれ、春は野鳥がさえずり、こぶし、山桜が咲き乱れ、上砂川に抜ける道は、夏の緑、秋の紅葉と絶好のドライブコースとなり、特に爾波山展望台からの眺望は素晴らしく、山麓を迂回する里山林道のハイキングコースは有名であり、なかなかスロープの続くスキー場として賑わいをみせている。

温泉の泉質は、硫化水素泉で温元から毎分一、〇〇〇立方湧出し、浴用、飲用として利用、その効めの良さは好評である。

滝川を起点に観光コースの設定も今後の課題であり、その実現策も緊要といわねばならない。

